

ちよつとおかしなサー
ヴァントの居るカルテ
ア

作者 B

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、ありえない歴史

牛頭天王、バビロンの妖婦、第六天魔王波旬

本来なら呼ばれないような英霊の側面がサーヴァントとして呼ばれるカルデア。

そこで繰り広げられる、至って平穩（当社比）な日常のお話。

目次

這い寄る太陽

1

這い寄る太陽

人理継続保障機関・カルデア

人類の営みを永遠に存在させるために設立したこの機関で証明された衝撃の事実。それは「2016年 人類の絶滅」だった。

「近未来観測レンズ・シバ」が観測した、西暦2004年の「日本のある地方都市」に存在する「聖杯」という名の観測不能領域。これを人類絶滅の原因と判断したカルデアは、「レイシフト霊子転移」による時間逆行での歴史修復を決定した。

これは、カルデアに残ったただ一人のマスターの、人理を救う物語である――

「はいはい！ いつもコンコン。貴方の頭上に這い寄る太陽、タマモちゃんです！」
カルデアの外は、今日も今日とて相変わらずの吹雪。

そんな中ハイテンションで現れたのは、青いビキニの上に無地のTシャツを羽織り、室内だというのにビーチパラソルを開いている狐娘。

本人曰く、真名は『玉藻の前』だそうだけど、前に特異点で見たのと印象違い過ぎない？

召喚されたとき、水着姿だったもんだから、びつくりしたわ。

「他所で召喚された私の話をされましても……いいじゃありませんか。私^{わたくし}だって、いつもの堅苦しい着物は脱ぎ捨て何もかも開放的になつたりしますよ」

いや、言いたいことはわかるんだけどね。

「まあ、私^{わたくし}のことはいいじゃありませんか。それより、一つ聞きたいのですけれど」

うん？ 何？

「——うふふふふふ。さあ、ますたあ。私たちの愛^{マイルーム}の巣へ参りましょう。」

ああ、これ？ 玉藻が来る前にきよひーと世間話してただけだよ。

「いや、どう会話したらマスターがぐるぐる巻きにされてるんですか。しかも、ご丁寧
に下半身を蛇^{りゅう}に変化させて拘束してますし」

いやあ、なんでだろうね——痛たたたた！ 清姫サン!? 流石にそれ以上締め付け

られると、中身が出ちゃうんですけど！

「……あら、玉藻さん。いらつしやつたんですね？ 男女の逢引を邪魔するだなんて無

粋なこと」

「そんな、着物の裾で口元を隠しながら悪女ムーブしてる人に逢引と言われましても。

わたくし私には蛙を捕食しようとしている蛇にしか見えないんですが」

「捕食……男女……愛の巢……二人きり……まあ、玉藻さんつてば、真昼間からはしたない」

「ええー……今の私わたくしが悪いんですか？」

二人が会話に花を咲かせているせいか、いつの間にか俺の目の前にも花畑が見えてきた。

あれ？ あそこに居るのは所長じゃないですか。おーい、所長ー！ え？ こつちに
来るなつて？ そんな釣れないこと言わないでくださいよー。

「——つて、そろそろマスターがやばそうですね。清姫さんには悪いですが……日輪の
力を借りて、いま必殺の『太陽拳』！」

「きゃあッー！」

玉藻が顔の前で横向きにダブルピースすると、彼女から強力な光が放たれた。

てか、俺も眩しい！ 目が超痛い！

「正氣に戻られたところで、さっさとずらかりますよ、マスター!」

「ああつ、お待ちになつて、ますたあ——ううつ、何も見えません……」

技の巻き添えを食らつて碌に目を開けられない俺、玉藻に手を引かれるままこの場を後にした。

ふう、さつきは流石に死ぬかと思つた。

「先程死にかけてのにあつさり流すとか、修羅場慣れしすぎてませんか? それはそうと、清姫さん。今日はいつてもよりテンション高かったですね。変化の方も、いつもは頭から蛇になつていくのに今日は脚からでしたし」

ああ、それはたまたま清姫の宝具の話になつて、『俺、蛇^イ人間^グより蛇^{ラミア}体の方が好きだなあ』つて言つただけだよ。

「相変わらず、なんてチョロ——こほん、マスター想いだこと。ですが、それだけですと、ハイテンションだった理由には弱いような」

後はそうだな……しいて言えば、ラミア形態になってくれた清姫を見て、思わず『その蛇肌を俺が体温調節したい』って言ったくらいかな。

「完全にそれじゃないですか！ そんなワンチャン告白に聞こえなくもないかもしれないよ！」

えー、俺としては、純粹に、健全に、体を温めてあげたいって言ったただけなんだけど。

「はあ……マスターの性癖は置いておくとして、ただでさえ女性が多いんですから、少しは自重してください。そんなことでは、いくつ命があつても足りませんよ？」

あんな素直に好意を向けてくれるのに、それを無碍には出来ないかなーって。

第一、そんな大げさに言うほどじゃないよ。あとは精々、酒呑に神便鬼毒酒片手に酒の席へ誘われたり、エリちゃんに貧血になるくらい血を吸われたり、丑御前に監禁されて駄目人間にされそうになったりとか、そのぐらいだし。

「やだ、ウチのマスター、命狙われ過ぎ。今日のところは御自身の部屋で休まれた方がいいのでは？」

いや、それはあまり意味がないんじゃないかな。

「はい？ それはどういう——」

「見つけましたよ、我が子^{マスター}」

ふと、俺を照らす廊下の光が影で遮られ、視界が薄暗くなる。

振り返ると、そこには源頼光、もとい丑御前が笑みを浮かべて立っていた。

「うわっ！ びっくりした……もう！ アサシンでもないのに、気配もなく背後に立つのやめていただけます？」

「部屋で待つていたのにいつまでたつても帰つて来ず。母は心配したのですよ？」

「しかも私の^{わたくし}ことが視界に入つていないし……マスター、もしかしくなくても、ついさつき言つていたのは」

うん。マイルームに返ると高確率で丑御前がいるからね。

「うわあ……」

「さあ、マスター！ 食事、運動、排泄、おはようからおやすみまで、すべてこの母が面倒を見てあげますよ！」

いや、流石にトイレの世話は恥ずかしいな。

「ツッコむところはそこですか!? ええい、もう！ 『呪相・雷天』！」
「なっ!?!」

丑御前が俺ににじり寄っている隙に、玉藻の呪術が丑御前を拘束した。

「帝釈天^{インドラ}がなんぼのもんじやい！ ほら、行きますよ！」

そして俺はまたもや玉藻に手を引かれ、その場を後にした。

それからというもの……

「はい、これ。私の部屋の鍵よ。え？　どういう意味か？　それは……もう、女の口から言わせないで。うふふ」

「そこ！　息を吸うようにマスターを誘惑しない！」

マタ・ハリから彼女の部屋の鍵を受け取ったり

「あら、マスター。お困りでしたら、私の箱庭で匿って差し上げましょうか？」

「それって、もしかしなくても監禁ルートと変わらないんじゃないんですか？」

幼いメディアに魔女の箱庭へ招待されそうになったり

「主殿ー！　隣に居る狐は狩ってもいいのでしょうか？　とても良い鼓が作れそうです

！」

「質問しながら抜刀するんじゃないやありませ——うわッ！　危なッ！」

バーサーカーよりも人の話を聞かない牛若丸に（玉藻が）襲い掛かれたりしたのだった。

「ぜえー、はあー、ぜえー、はあー」

玉藻、お疲れ様。

それにしても、今日はやけに多かつたな。まあ、これだけ来れば今日はもう大丈夫でしよ。

「ふうー、ようやく息が整った……。今日は、マスターの愛され具合を改めて再確認させられましたよ」

いやー、マスター冥利に尽きるね。あつはつは！

「何を呑気なことを。そもそも、マスターが何でもバツチ来いなスタンスなのも悪いんですよ？ 嫌なそぶりを見せなければ、相手は知らず知らずのうちにエスカレートしてしまうんですから」

玉藻が窘める様に注意する。確かに玉藻の言いたいことは分かる。だけど――

……俺は、嫌って思ったことなんて一度もないよ。

「あら、そうなんですか？」

うん。困ることはあつてもね。

だつてそうでしょ？ みんな、俺みたいなただの人間を、大なり小なり信頼してくれ
る。

「……」

サーヴァントだけじゃない。スタッフの人も、たまたま生き残つただけの俺を信じて
くれてる。だから、俺もみんなからの想いを余すことなく受け止めたい。

本当に、ただそれだけだよ。

「……」

俺の独白を静かに聞く玉藻。

そんな真面目に聞かれると、ちよつと気恥ずかしいな。

「……随分とまあ、志が大きいこと」

すると、玉藻は俺の身を覗き込むように顔を近づけてきた。

「身に余る愛は貴様自身を滅ぼすというのに」

そう言つて笑みを浮かべる玉藻。だが、その表情は先程までの燦々としたものではな
く、あざ笑うかのように口角を吊り上げ、薄眼から覗くその瞳は金色に染まる。

刹那 場の空気が一変する。

空気は水気を帯び、降り注ぐ光は朝露のペールで揺らめく陽射しとなり、辺り一帯が

神聖な空間へと変容する。

息苦しい。呼吸ができない。

目の前に居るのは玉藻。だというのに、まるで巨大な太陽を前にしているかのようで、今すぐにも目蓋を閉じて目の前の光景から逃げたくなる。

だが俺は、それでも彼女から目を反らさなかつた。

「かつつかか、”妾”^{わらわ}をも飲み干そうとするか。よいよい。そうでなければ、出張ってきた甲斐が無いというもの」

俺の様子を見て満足したのか、近づけていた顔をすつと離す。すると、いつの間にか、目も表情もいつもの玉藻に戻っていた。

「では私も、すべてを受け止めてくれるのを楽しみにしておりますわ。マスター」
いつもの小悪魔めいた口調で玉藻は背を向けた。

クラス：キヤスター

真名：玉藻の前／白面金毛

太陽神としての側面が強化された姿。より正確に言うならば、玉藻の前の皮を被った白面金毛。

大化生・金色白面は本来であれば聖杯戦争でも呼び出すことのできない神霊・悪霊・妖怪・荒御魂の類であるが、自身玉藻の前の分霊の霊基に入り込むことで無理やり召喚に応じた。

水着姿なのは、太陽の力が霊基に影響を与え、座に登録されていた『太陽に最もふさわしい姿』が反映された結果である。

本人曰く、あと2回変身を残しているらしい。

スキル

・単独顕現：A

単体で現世に現れるスキル。これにより、『分霊の皮を被る』という滅茶苦茶な方法でも現界することができる。本来はある特殊クラスしか持ちえないスキルだが――

・呪術：EX

・変化：EX

借体成形とも呼ばれている。

ただの人間なら目の前に立つだけで蒸発し、サーヴァントであつても手を払うだけで消滅させる。そんな規格外の力を持つ白面金毛は、召喚に応じるために、同じく規格外のランクであるこのスキルによって、神霊からサーヴァントへと自らの意志でスペックを落としている。